

利根川



VOL.10

2001 1月号

利根川水系農業水利協議会
群馬県支部情報紙

編集・発行 利根川水系農業水利協議会群馬県支部
〒371-0837 群馬県前橋市箱田町350
027-251-4105

会員紹介コーナー

佐波新田用水土地改良区



佐波新田用水土地改良区は佐波新田用水耕地整理組合を前身として、大正13年群馬県知事の認可を受け、昭和27年3月31日付33号で組織変更を認可されました。

水源は前橋市筑井町の桃の木川の筑井堰から取水し、前橋市筑井町、伊勢崎市波志江町等流れ、粕川サイフォンを潜り（一部粕川に放流）下流の境町へと流れています。一方、東武伊勢崎線剛志駅下流、粕川18号堰から取水した水路は粕川サイフォンを超えた水路と合流し、境町市街地を通り早川サイフォンを潜り尾島町へと流れています。なお、18号堰からの水路（世良田線）は1608年（慶長13年）に開削されたのが始まりと言われ「世良田御神領用水」「お宮用水」などとも呼ばれました。また、粕川サイフォンは、大正12年に築造され、伊勢崎市の粕川東部から境町・尾島町への農業用水の確保、安定供給が図られました。

全関係市町村は前橋市、伊勢崎市、境町、尾島町と2市2町ですが、佐波新田用水土地改良区に関する市町村は、伊勢崎市、境町、尾島町と1市2町となっています。

一般的には用水路は全体で八坂・佐波新田用水と呼ばれていますが、土地改良区は、八坂堰土地改良区と佐波新田用水土地改良区と2つに分かれています。

管理区分は筑井堰から粕川サイフォン入口までは八坂堰土地改良区が管理し、その下流側は佐波新田用水土地改良区が管理しています。

また、用水路は築造以来長年の経過により老朽化が目立ち、近年は県営かんがい排水事業、県営水環境整備事業、県営かんがい排水事業（排水対策特別型）等の補助事業により改修を行い農業用水の安定供給、農業経営の安定、環境整備等を目指しています。

群馬中部土地改良区



群馬中部土地改良区は、中部用水路及び鳴沢湖を維持管理する土地改良区です。

鳴沢湖は箕郷町富岡地内にあり「鳴沢」の名称の起源は古く、貯水池の北側中央部に清冽な地下水が滾々と湧き出ている所があります。昔その近くに鳴沢寺という寺があり、古来その辺りを鳴沢といい伝えられてきました。その直下に貯水池の築造が決まった時、永遠に涸れることのない水源地の呼び名として、最も相応しいこの鳴沢の二字が用いられました。

鳴沢湖は、築造当時は中部用水といわれ、中部用水の中部とは、昔の群馬郡中部のことであり、この中部用水という言葉こそ郷土の先人の長い年月にわたる苦勞と、それを克服した非常な努力の歴史につながるものであり、この湖水は中部用水の鳴沢貯水池というのが最も的を得た呼び方といえます。

鳴沢湖の築造は、昭和初期の箕郷町内最大の事業であり、打ち続く旱魃に疲れ果てた農民が、豊かな水を求めて苦心すること数十年、満々と堪えられた湖水に榛名の麗峰が映しだされるまでには、江戸時代に榛名湖の水をスルス岩の下を通して取水しようとして失敗した歴史もあり筆舌に尽くし難い選任の苦勞の歴史が刻まれています。

貯水量1,283千m³ 敷地面積18ha 水深17.57m 配水路7.5km 主水源は榛名白川より取水し関係市町、高崎市、箕郷町、群馬町の夫々一部を潤しています。

利根加用水地改良区



利根加用水は県南東部穀倉地帯にあり、利根川に沿って千代田町、明和町に至る東西20 km、毎秒4.34m³を水利権とし、1,200 haの水田を潤している用水です。

古文によると、この地帯は渡良瀬川を水源とする休泊堀用排水を引用していましたが農地の開拓により水不足は深刻な問題となりました。地区の名主等により大泉町古海地先の利根川より引水し休泊堀に合流させて利用することを考え、天保10年水路が開削され利根川の水が加えられました。これが利根加用水と呼ばれた由縁です。

昭和30年頃より年々利根川の河床低下が進み、自然流入が困難な状況となり、揚水機の敷設を検討していました。その後、昭和41年水資源開発公団による利根大堰建設工事が着手され、利根加用水は大堰を境にして上下流に分割され、下流は邑楽用水路となり公団管理による利根合口からの取水となり、上流は大泉町古海の元坎に揚水機場を完成し、長年にわたる水引の苦労は解消されました。

以来30有余年が経過し、利根川の河床低下とみお筋の変化等から不安定な取水が余儀なくされることとなったことから、取水口下流4キロ地点（大堰の湛水区域内）に揚水機場を移設し、水路はパイプライン化し、コンピュータを利用した高度な水管理を行っているところです。

農業用水に関するQ & A

Q

農業用水は、循環してムダなく利用されていると聞きましたが？

A

農業用水は降雨を有効に利用し、不足分だけを取水しています。また、消費されるのは、取水量全体の約2割に過ぎません。大部分は使用后川へ戻ったり、地下水になったりして下流で再利用されます。さらに、循環の間に酸素を取り込んだり、ろ過されたりして、浄化されるのも農業用水の特徴です。





みぬまだい 大がかりな用排水システム 見沼代用水

かつての関東平野は、大小の川や沼が入り組んでいて、開発の手のおよばない土地だった。それが、江戸時代になって、豊かな農地に変わっていった。初めは自然の力を利用して水をにがしながら管理した「関東流」と言われる工事方法で、今の利根川のすがたができた。江戸後期になると、耕地が増えたため、川に人間の力を加えて管理するようになった。これが、「紀州流」と言われる工事方法だ。関東流から紀州流へと変わる様子は、見沼代用水に見ることができる。

見沼は、埼玉県浦和市にあった細長い沼。関東流の時代には、下流の農地の用水源として水量を増やす工事が行われ、ため池として利用されていた。でも、増えていく農地に水量が追いつかなくなり、紀州流の工事が進められることになった。見沼を埋め立てて2,000畝の新田を作り、代わりに利根川から新しい用水路（見沼代用水）を引き、関東平野中部地域の水を確保した。見沼代用水は、現在も農業用水だけでなく、東京都へも生活用水を送って、人々の生活に役だっている。

用語解説コーナー



河川流量の呼び方とその定義

河川流量とは

河川の流況を表す指標として次のものがあり、単位は m^3 / s で表します。

最大流量	年間中の最大の流量
豊水流量	年間を通じて95日を下まわらない程度の流量
平水流量	年間を通じて185日を下まわらない程度の流量
低水流量	年間を通じて355日下まわらない程度の流量
最小流量	年間中の最小の流量

利根川水系渇水対策連絡協議会幹事会
が開催される！！

平成12年10月31日、関東地方建設局「災害対策本部室」において渇対協の秋季定例会の幹事会が開催されました。

利根川水系農業水利協議会は、建設省が事務運営している「渇対協」にかねてから関東農政局の参加方針を出し参加要請をしてきました。その要請を受け関東農政局は参加のための調整を行ってきましたが、この度渇対協のメンバーとして参加する運びとなりました。

なお、今回の打ち合わせ会議内容は、利根川水系が渇水になっていないので水源状況が主な報告内容となっております。

主な会議内容



関東地方建設局河川部丸岡部長の挨拶要旨

・平成8年、平成9年と続けて渇水となり近年は、2年に1回程度渇水の発生が起こり本年度もこれから降雨しだいでその危険性があるため渇水発生時には協力頂きたいとの要請がありました。

利根川上流ダム群等の現況（利根川水系のみ抜粋）

- ・藤原ダム：クレストの改修工事
- ・菌原ダム：排水トンネルの改修工事
- ・下久保ダム：上流に貯砂ダム建設（1月末日まで工事、2月1日から貯水開始）
- ・草木ダム：表面取水設備（3月25日まで工事、3月26日から貯水開始）

今後の見通し

- ・気象庁予報
1カ月予報（10月27日発表）、関東甲信越地方の降水量
「少ない」確立20%、「平年並み」確立40%、「多い」確立40%
3カ月予報（10月23日発表）、関東甲信越地方の降水量
11月：平年並み、12月：平年並み、1月：平年並み
- ・利根川上流8ダムにおける11月以降の大量の降雨は、見込めないことと奈良俣ダム以外のダムについては、ダム運用上施設の修繕工事により貯水量が制限されるため、融雪時期（3月下旬頃）までは貯水量の大幅な増加は望めない状況。また冬期は需要に対して降水量が少ないことから、例年12月からダム貯留水を下流河川に補給している状況であり、今後はダムの貯水量の低下が予想される。

今後の対策

- ・利根川水系上流ダム群の貯水量の確保
利根川水系における流況調整施設においては、降雨状況・下流部の水利用を踏まえた運用を行い、ダム貯水量の確保に努め、冬期及び来春の水需要に備える。
- ・利根川水系渇水対策連絡協議会の取り組み
水資源の有効利用に努めるとともに、広報活動を通じて節水への協力を要請し、取水制限等の実施を行う渇水対策について機動的に対応していく。